
いつだって元気で。

比翼の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつだって元気で。

【Nコード】

N6947T

【作者名】

比翼の鳥

【あらすじ】

異能の目が開かれる時、奇跡の扉が開かれる。

そう言い伝えられていた実家の襖。

なんとなしに開いてみたらそこには見知らぬ世界が広がっていた。

彼の持つ異能の力がもたらす光は世界にとって幸か不幸か。

それは神のみぞしる事かもしれない。

「注意」

雰囲気小説です

男主／異世界／異能／主人公至上主義

始まり

鳥肌が、立つ

えもいわれぬ雰囲気に飲み込まれそうになる

いつでってここは自分にとって特別で特異で、嫌いだった

息が切れるような感覚に陥る

唇を噛んで妙な動機を押さえ扉を強く握る

「朔・サク・」

低く響くその声に名を呼ばれ振り向く

そこには父が立っていて朔を見つめる目は思慮深く沈んでいた
ずるり、と体が崩れ落ちる

父が来て気が緩んだようだ

「と、さん」

必死に紡いだ音は情けなく揺れる

知らないうちに父は朔に近づき力強い手で引き上げた

言い伝えがある

自分の一族には異能が備わっていてそれはこの世界のものではない、と

父から聞いていた言葉を思い出す

「お前には異能が顕現したようだ
紫藤家の血だ」

静かに言う父の顔を見つめる

「父さんにもあるのか？」

紫藤家が元々そういう一族だった事は知っている
ただ他の家族が力を持っているとは聞いたことが無い

「占の力が少々あるだけだ
・・・お前にこの扉の事や異能の事を話そう
着いて来なさい」

父の後ろ姿を見つめたて溜め息をつく
なぜかいつもの日常はもう、送れないような気がした

始まり（後書き）

最初からクライマックスです
↑

緊張感が部屋を包む

ここに居るのは父と母と祖父

そして自分

たった四人しかないのになぜかたくさんの目線を感じる気がした

「朔よ。

怖がるでない

ここは先祖の間じゃ」

朔は意味が分からない、と言った顔をして説明を求める

「先祖の魂が集う部屋じゃ」

祖父の言葉に呼応するようにふつと風が頬を撫でる

確かに言いよの無い力を感じる

でも、おかしい

この間には以前も数度入った事がある

「異能が顕現したらしいわね」

母の言葉で思考から戻る

「多分そうだと思う」

「多分ではなくそうなのじゃ」

祖父がかぶせるように言葉を続ける

「あの扉は身の内に秘める力を表に出す門じゃ
異界と繋がっておる」

突然の言葉に朔は目を見開く
異世界。と心の中で呟く

「お父様

その事を話す前に家の成り立ちを説明しなければなりませんわ」

母が朔を気遣うように見つめる
視線を感じて母をみた朔は軽く頷く
説明を求める合図だ

「そうじゃったな

直道・ナオミチ・頼む」

久しぶりに聞いた父の名前を反芻する

直道、自分の名前を擦りもしないので少々残念だ

「まずは紫藤家の成り立ちからだな

紫藤は平安から続く陰陽師の一族で主に占、筮竹、星読みを生業としていた

故に先見や予見の力を古くから持っていたのだ

だが人と言うのは業が深く、さらに強い力を求める

紫藤も例外ではなく手を出してはいけないものに手を出した」

そこでいったん言葉を切る父に齒痒さを覚える

しかし祖父の鬼気迫った顔や父の言いくそな表情に悟る
朔に異能が無ければ知る事の無かった話だと

「手を出したものは「鬼」

鬼とは魔の力を持つもの

故に鬼の心臓を食し、血を飲んだ」

「――っつ」

喉奥から何かがせり上がってくる
目の奥が熱く焼ける

「異能の力と言うのはその呪いを正当化するための手段でしかない

――朔」

鋭く名前を呼ばれる
生暖かい雫が頬を伝う

「あの扉は鬼のいた世界への扉だ
異能が顕現したと言う事はお前の中の鬼が扉の向こうに惹かれたか
ら」

惹かれた？
誰が、俺が
俺の中の呪いが

頭が割れそうな程に痛み涙が止まらない

「――あつ・・・」

泣いている、自分の中の鬼が

理解する

鬼は元の世界に戻りたがっている

朔の精神に影響を及ぼすほど願っている

帰りたい、と

それは魂の慟哭

悲しいまでの、叫び声

「朔、貴方には申し訳ないのだけれど」

母が泣きそうな顔で告げる

「一族のために鬼の願いを叶えてあげて

扉を通って

鬼を元いた場所へ返してあげて」

昔聞いたことがある

母は風の声が聞こえると

多分、母は鬼の声が聞こえるのだ

だから泣きそうな、辛そうな顔をする

「・・・はい」

それが俺にしか出来ない事ならば
俺がやろう

「あちらへ渡れば戻って来れないかもしれぬぞ」

いつもは気難しい祖父が淡々と告げる
それは何かを隠している暗示

「はい」

先ほどよりもすらりと言葉がでる
鬼が、喜んでいる
俺の気持ちを感じて、帰れると

「・・・・・・・・」

父は無言で固まっている
何を思っているのかわからないが俺の事を心配していると嬉しい

「じゃあ、一度部屋に戻ります」

深く一礼して最後に伝った涙を拭う

ざわりと部屋が揺れる

自分達がやらなかった事を

まだ年若い少年がなそうとしている事に敬意を

自室はやはりほっとするのか緊張の糸が切れた
がくりとベットに座り込む

さきほど聞いた事が衝撃的すぎて思考が着いて行かない
確かに紫藤は鬼の末裔ならなんやらと同業者から言われた事はある
それに親族の尋常ではない異能の力に「そうかもしれない」と思っ
た事も多々ある
だが、そんな残忍な方法で力を手に入れたなどとは・・・思わなか
った

「なんで・・・俺、なんだ？」

声に出してみると弱々しく情けなくなる
でもこれは本心なのだ
先ほどは自分の中の鬼だろうと思われる感情に引きずられて感情的
に決めてしまった事
異世界へ行く
恐怖していてもなぜか歓喜も湧いてくる
不思議な感情

――でも行くしか無い

男なら覚悟を決めよう、と思う

――

――

――

――

ガラスの美しい模様が光に反射して光る

「そこ」はまさに物語の中から抜け出して来たような場所
そこでは人ならざるもの達が佇んでいた

「もうじきに我らが罪がやってくる」

「いいえ。罪ではない」

「愛された子だ」

「だが神は罪とした」

・・・

「神すらも愛させる子だ」

「神の加護が降りし子よ」

さわさわとそよ風が吹くように声があたりに揺れ消える
それは彼らの性情を表しているかのようだった

「・・・沙羅・サラ」

ここには居ない彼らの仲間が思い出させる
なぜならば罪であり、愛されるべきである子は沙羅に縁の深い者だから

ゆらりくゆりと陰が揺れる

彼らはここに居てはならない

どこにも根を張らぬ放浪の民

元いた場所を追い出されはしたがそれは彼らにはどうでも良い事だった

ざわりざわりと風が揺れた

白ノ場所

――朔は白い空間に浮いていた

「・・・はぁ!?!?」

突然の出来事に戸惑いを隠せず大声を出す朔

確か家族に別れを告げ一人で扉の中に入ったはず
暗闇に入ったのにナゼ真つ白な場所に居るのか

「愛し子よ」

「・・・っ」

脳内に響く声に鳥肌が立つ

不思議な声だった

低いようで高い、高いようで低いような声だった

「我が声に身を委ねよ」

声に言われると無意識にしたがってしまう

白い空間では重力が関係ないようで宙に浮いてしまった
——とつくに平衡感覚なんて無くなってしまうていたが

「愛し子よ」

愛し子、と口内で呟く

「不思議に思う事は無い
そなたは生まれたときから愛されている
・・・我にも、世界にも」

強い風が吹いて一瞬目を閉じる

次開いたときには男が立っていた
男は若木のようなはつらつさと大きな川のような激しさ、山のような
泰然さも持ち合わせている

自然と背筋が伸びる

「楽にしているがよい」

愛しさのにじむ声に驚く
自分はこの人に面識も何も無い

「あの・・・誰、ですか？」

上目に尋ねると苦笑が帰ってきた

「そうであつたな

そなたは我を知らぬ

我はそなたの住む世界とは別の世界の最高神、オーディー」

――神？

頭大丈夫かこの人は。

とは流石に思わなかった

朔は陰陽師だ

陰陽師とは神の力も使う

神を否定する理由はまったくくない

「失礼いたしました

あの、別の世界とは？」

気まぐれな神が教えてくれるかはわからないが聞いてみる
するとまた神は苦笑して

「愛し子よ。かしこまらなくて良い

別の世界とは二つの大陸からなる世界
もちろんそなたのいた世界とは文化も言語も人種すらも違う

そなたには関係ないがな」

オーデューは朔に近づき頭を撫でる

「これはせめてもの罪滅ぼしだ

そなたの心が晴れ、真実を知る事を祈ろう」

どんと胸を押され後ろに数歩下がる
下がったつもりだが下には何も無かった
そう、何も

白い空間は消え去り闇が広がる

朔は落ちた

水の国

黒い空間から抜け出て直ぐに目に飛び込んで来たのは川だった
一本の大きい川が（多分）町に向かって延びている

「ここが鬼の故郷・・・？」

鬼と言えば地獄の番人という観念がある
朔は陰陽師として正しい知識を知っていたがやはりこんなに美しい
場所だとは思わなかった

「とりあえず歩こう」

鬼を元いた場所へ返すという目的は長期戦になる可能性が高い
とりあえず情報を集めるために人が居る場所に行った方が良さだろう
そこで朔は自分の服装を見る

「ー着物で来てしまったがこの常用の服はなんなんだろう

みた感じの町の雰囲気では西洋風だ
着物は不審かもしれない
が、コレ以外なにも持っていないので早々に諦める

町に近づいて行くところ事があった
町の周りには一つの川と二つの大きな堀があると言う事
堀は川が氾濫した時用のため池の様な物だろう
小さい水路も町に向かって延びている

「凄いな」

多分水のおかげで敵に攻め込まれてもそう簡単には落城しない

「そこのお方は旅人さんかい？」

老人のようなしわがれた声がした
目線をやると枯れ木の様な老婆が一人、ぽつんよ座っていた

「……そのようなものだ」

慎重に返すと咳き込むように笑う老婆

「お前さんには光が見えるねえ．．
しかし紫の瞳とは珍しいのお」

「紫の．．瞳？」

はっとして水路を覗き込む

確かに朔の瞳は濃い紫色に変わっていた

黒という日本人らしい色だったはず

この世界に來た事で突然変異みたいな物なのだろうか

「紫とは高貴な色じゃ

旅人さんよ、珍しい服を来ているのう

．．．珍しい瞳に珍しい服じゃ目立ってしまう

私のローヴを持って行きなさい」

老婆が懷から濃い藍色のローヴを取り出す

「しかし．．．」

「良いのじゃ

ただのばあの好意ゆえに受け取ってくださいな」

また咳き込むように笑って押し付けてくる

・・・受け取ろう

「優しい貴方に神の加護を」

せめてもの恩返しに老婆の額に六芳星、籠目印を描く
気休め程度だが陰気から守ってくれるだろう

「ああ、ありがたい」

力を感じたのか老婆は頷く

・・・なんだか神の力が強まっている気がする
すみ渡った空を見晴るかしオーデューを思い出す

オーヴを羽織ると日差しが遮断され少し涼しくなった

がやがやと活気がある町中へ来た
色とりどりの服が待っている

その中で暗い色のローヴ姿の人の姿もあってほっとした
浮いていたらどうしようと思った

「おにーさん！ーこれおどうだね
」

「ローヴの埃落としましうかー？？」

「宿にここはどうだい？」

次々とかけられる声に手を上げて断る
中心部まで行って書店のような所へいくつもりだ

「・・・もし」

大きな声ではないがはっきりとした音が耳に届く
なぜか胸がどくりと鳴った

声の主はまだ子供と言っても良いくらいの年の人で目鼻立ちのくっきりした美少女だった

「こちらへ」

無表情に手を掴まれ連れて行かれる
不思議と抵抗しようと言う気は起きなかった

「私の名前は沙羅
お前の名前は？」

勝ち気な瞳に見上げられて思わず苦笑する
沙羅は朔よりも頭三つ分くらい低い身長で目線がキツく感じる

「俺は紫藤朔」

空いている手で頭に被っていたフードを外す
すると沙羅ははっとしたように朔を見つめる

「お前はアースか」

「・・・アース？」

首を傾げて沙羅を見ると驚いた後、なんでもないと言首を振った
なんなんだろう

「とりあえず着いてこい」

さらに足早になる沙羅に着いて行くために朔は小走りになった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6947t/>

いつだって元気で。

2011年10月9日03時28分発行